令和４年・５年度　産業振興会議

提言書

はじめに

「八尾市産業振興会議」では、平成１０年度に今後の産業振興の方向性や長期的な施策の枠組み等を提言して以来、「八尾市総合計画」に反映いただきたい産業振興に関する施策体系や、「八尾市中小企業地域経済振興基本条例」の早期制定、「ＩＴを活用した八尾の産業振興方策」、「産業集積の維持発展に向けた具体的方策」等さまざまな施策提言を行ってきた。

また、過去に参加した委員の想いが連綿と現在まで受け継がれている。決して、それぞれの時代の産業振興会議が独立して議論しているのではない。過去の産業振興会議で議論された提言が基礎となり、その基礎の上に、その時々の課題について委員で議論し、それぞれの時代に求められる提言を行ってきたのである。今期の産業振興会議もまさにそれを体現するものとなった。

今期は、八尾市長より、前回の提言内容である「やお糠床モデル」という手法を通じて、地域課題を解決するための「解」を創出するために、どうすれば「発酵」するのかを実証実験し効果検証する「八尾の未来を共創する~糠床モデルのチャレンジ~」についての諮問を受けた。これも、前回の提言を基礎としたものとなっている。前期に提唱された地域全体での価値創造を生み出す考え方である。

「やお糠床モデル」について、前期の産業振興会議の委員から、「自分たちの議論により生み出した考え方である『やお糠床モデル』の実証実験をやってみたい。」、「具体的な『やお糠床モデル』の事例を作りたい。」との意見があがり、まさに、市の諮問内容と委員の意見がマッチする形で進めることになったのである。また、実際に実証実験に取り組むために多くの委員が前期に続いて、令和４年・５年度の産業振興会議の委員を担う結果となった。新たなメンバーとして、前回の委員会の中で必要と求められた学校教育関係者も加わり、さらに、異業種として農業従事者の方も委員に加わることで、意見の幅が広がり、より具体的な議論を進めることができた。

今期の産業振興会議において、「やお糠床モデル」の実証実験について議論を進めていく中で、委員から「最終的には、挑戦する人を応援するまちにしたい。」や、「子どもたちを学校だけでなく、地域や企業で育てよう。」、「若手社員が集まれる場を作ろう。」など、実証実験のゴールやターゲットを明確にする意見があがった。また、今期の議論の中心となるキーワードとしては、「子どもたちの創造性を育む」「農地活用」「コミュニティとしてのみせるばやお」と３つが挙げられた。そして、中でも産業振興会議という限られた時間の中で、今期は、実証実験として取り組みやすく、また具体化しやすいという視点から「子どもたちの創造性を育む」、「コミュニティとしてのみせるばやお」の二つに絞り、実証実験を行っていくことになった。

実際に、今期は上記の二つのテーマをもとに、これまでもすでに取り組まれてきた活動に加え、新たに取り組まれた活動を実証実験として行っている。具体的には、市内の小中学校で行う出張講座やキャリア教育に関する授業、大学と連携したプロジェクト、市内企業の若手従業員を対象とした取り組み等である。これらの取り組みについては、具体的な実証実験プロセスを定め、各委員が積極的に取り組みという、前々回の提言にある「Ｂｅ Makers!」を体現する形をとり、本提言書では、それらの活動について具体的に、内容や考察をまとめている。

そして、これらの実証実験の結果を踏まえ、今期の産業振興会議では提言を３つの項目で取りまとめた。具体的には、①新社会人の交流促進、②八尾市に存在する課題を汲み上げるための仕組みづくり、③学校教育現場との連携についての３項目である。この提言内容を市政運営の参考に、各種施策の実現に向けた具体的な取り組みが進められることを期待している。

目　次

はじめに

第１章　糠床モデルと実証実験について

第２章　具体的な事例について
　2-1　小学生向け
　・ジュニアエコノミーカレッジ
　2-2　中学生向け
　・ほめる達人講座
　・八尾の社長（経営者）に学ぶ
　2-3　高校生向け
　・school FactorISM
　2-4　大学生向け
　・KINDAI FactorISM
　・産学連携プログラム『枝豆プロジェクト』
　・架け橋シューカツ Bar
　2-5　新社会人向け
　・新入社員歓迎ランチ会
　2-６　社会人向け
　・あきんど起業塾
　・やお創業ゆるっとカフェ
　・環山楼塾
　2-７　地域まちづくり
　・まちのコインを使った商店街の活性化

第３章　子どもの創造性育成に向けた学校との連繋：学校向け資料について
第４章　考察

第５章　提言
　5-1　様々な課題のくみ上げ
　5-2　従業員同士の交流
　5-3　学校との連携

第１章　糠床モデルと実証実験について

本章では、前期において提言された「やお糠床モデル」の概要について説明し、今期の産業振興会議の課題として設定された「やお糠床モデル」の具体化のための実証実験に関する考え方、ならびに方法について述べる。

1-1　やお糠床モデルの概要

「やお糠床モデル」とは、2020-2021 年度八尾市産業振興会議提言書において提唱された、地域全体での価値創造をめざすモデルである。この「やお糠床モデル」は、従来型の直線的な成長モデルではなく、地域に暮らし、働く人々や、地域で活動する企業や組織、諸団体、もちろん行政などが、それぞれの得手を活かして、それぞれを補い合い、支え合いながら、良質な化学反応としての“発酵”を促し、結果としてイノベーティブなアクターが活発に動き、価値創造が実現されるという状態をめざしている。

この「やお糠床モデル」において重視されているのは、地域をエコシステム（生態系）として捉える視点である。地域においては、さまざまな機能が相互依存的に関係しあっている。地域の社会的な人間のつながりであったり、受け継がれてきた文化であったり、それを支えている自然環境であったり、そういったさまざまな側面が密接にかかわりあって、地域での生活が成り立つ。産業あるいは経済もまた、その一環なのである。このように考えると、地域における産業振興は、単に経済や技術のみに限定されるのではなく、地域における人と人とのつながり＝社会的側面、それを支える文化的側面、その基盤にある自然環境など、さまざまな側面が織り重ねられたうえに成り立っていることがわかる。八尾市の場合は、とりわけ地域や人と人とのつながりといった点への関心が高いといえる。2023 年 10 月に開催された YAO FESTA や FactorISM などへの多くの市民の方々の参加は、これを裏打ちしている。

こういった地域への参加の志向性は、これまでの各種団体や八尾市などの地道な取り組みによって高まってきた。八尾市において発酵をメタファーとした「やお糠床モデル」が提唱されたのは、こういった一人ひとりの市民、そして市内で活動する企業や組織、諸団体のそれぞれの自律的活動とともに、それぞれのあいだでの交流や協働の帰結である。

このように、「やお糠床モデル」は市民や企業、組織、諸団体の自発的活動とそれぞれのあいだでの交流と協働に根ざしている。より具体的な点をいくつか確認しておきたい。

（1）　市民や企業、組織、諸団体が抱える諸課題や、それぞれが持っている能力などを持ち寄る。
（2）　それらの諸課題や諸能力を結びつけ、新たな解決や提案、可能性を生み出す。
（3）　これらを可能にする基盤としての“糠床”としての地域を整え、「かき混ぜる」。
（4）　さらに、みずから八尾という糠床に参加し、「かき混ざる」アクターが生まれる。
（5）　結果として、八尾がイノベーティブで支え合う地域として内発的に発展する。

これらをいかにして具体化していくのか、「発酵」のメソッドを探る、それが今期の産業振興会議において引き継がれたテーマである。

1-2　やお糠床モデルの具体化としての実証実験:エフェクチュ

アルなプロセスとして

このプロセスを実現していくために、どういった試みを重ねていく必要があるのか。やお糠床モデルは、発酵という考え方が示すように、旧来型の直線的な実践プロセスとは異なる側面を持つ。旧来型の直線的な実践プロセス、目的に即して計画どおりに実行していくプロセスあるいは考え方をコーゼーションと呼ぶが、変化が激しく、多様な可能性が考えられうる状況において、状況適応的に“よりよい”可能性を探究しながら進んでいくプロセスあるいは考え方が重要となる。これを、エフェクチュエーションと呼ぶ（サラスバシー, S., 加護野忠男監訳『エフェクチュエーション : 市場創造の実効理論』碩学社、2015 年）。エフェクチュエーションの考え方は、近年のアントレプレナーシップの研究や実践において注目されている。

この考え方においては、（1）手持ちの資源で何ができるか、（2）誰と一緒にやっていけるか、（3）プロセスのなかで、状況の変化などにどう対応して、ゴールを見出していくかといった点が重視されている。地域における価値創造において、これらの点はきわめて重要である。もちろん、目的やゴールを事前に明確にして、そこから因果関係を考えながら、環境変化にも対応しつつ、目的やゴールの実現をめざすコーゼーションの考え方やプロセスも重要である。しかし、八尾市のように、市民や企業などの自律性・自発性、そして交流や協働が活発な地域においては、エフェクチュエーションのプロセスや考え方は、整合度が高いといえる。

そこで、今期の産業振興会議においては、委員の方々からの提案や、市民の方々から市役所に寄せられた課題などをもとに、そこから「誰ができるか」「誰と一緒にやっていけるか」を探索的に実験していくことを最大のテーマとして設定した。この実験においては、これまでにすでに開始されていたものを実証実験として組み込んだものもあれば、新規に実証実験として企画したものもある。そのため、効果を確認できたものもあれば、次期以降に継続的に展開することで効果を確かめていくべきものもある。

エフェクチュアルなプロセスとして実証実験を位置づけるとき、継続的な実施、そして状況に応じた柔軟な変更が重要となる。この点については、産業振興会議の委員の方々、そして八尾市職員、さらには協力をくださった方々の多大なお力添えがあったことを強調しておきたい。

1-3　実証実験導入のプロセス

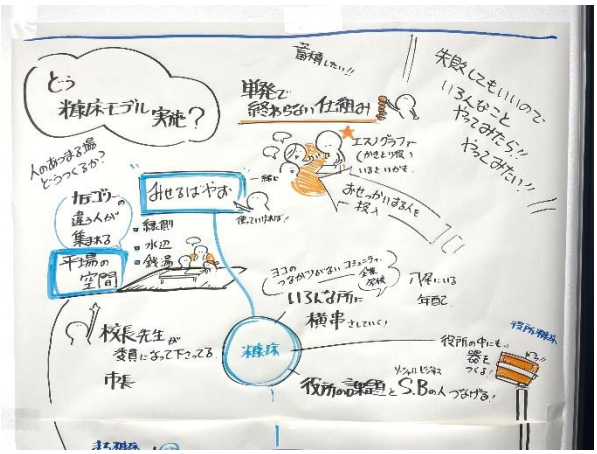
今期の産業振興会議が発足するにあたって、前期にも増して、多様なメンバーの参加を得ることができた。これによって、より広範な社会的・経済的課題を採り上げることができた。もちろん、今期のうちに実証実験にまで進めることができた課題もあれば、継続検討となったものもある。継続検討になったものも、将来的な可能性が少なかったからではなく、人員的限界によるものであって、否定的な意味合いは全くない。

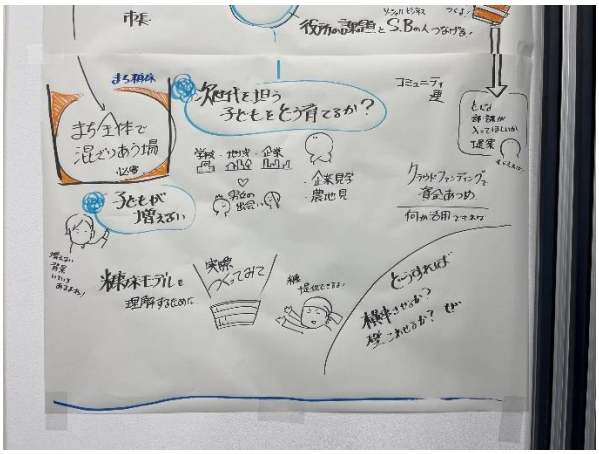
以下、令和４・５年度産業振興会議の道のりを記載する。

（１）　今期の方向性について（令和４年度 第１回本体会議）

市長より受けた諮問に対して、今期は「実証実験」を行っていくこととした。第１回本体会議では、「かき混ざる」という産業振興会議ならではの造語を用いて、糠床にどのようなアイデアや課題を入

れるのか、委員それぞれが意見を出し合った。「糠床モデルには、縁側や銭湯のようなカテゴリーの違う人が出会って話ができる空間が必要」といった概形の定義付けであったり、「次世代を担う子どもたちがチャレンジすることを応援するまちにしていきたい」といった八尾市の子どもを軸にした取組みに意欲的な意見もあった。また、「農地の活用」や「コミュニティとしてのみせるばやお」についても意見が出た。



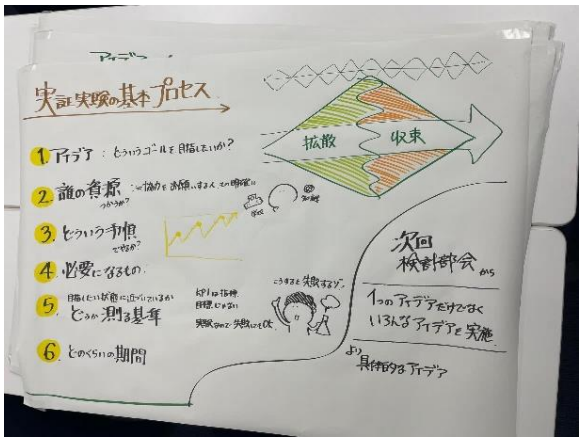


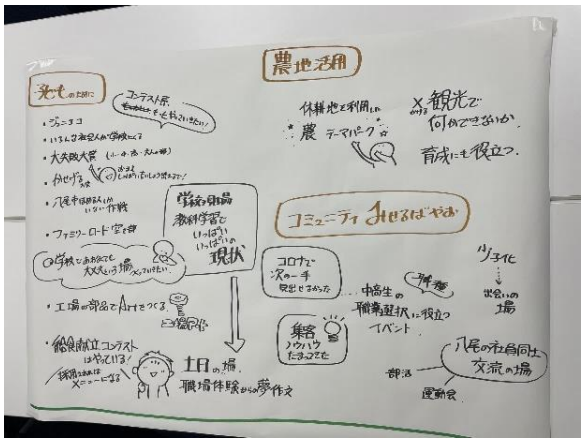
（２）実証実験の実施に向けた意見交換:「子どもたちの創造性を育む」「農地の活用」「コミュニティとしてのみせるばやお」（令和４年度 第２回本体会議）

今期のテーマである実証実験を行うにあたり、前回で出た意見をピックアップし、「子どもたちの創造性を育む」「農地の活用」「コミュニティとしてのみせるばやお」の３つのキーワードに定めた。この３つのキーワードを軸に実証実験を進行していくため、基本プロセスについて整理を行った。

その結果、「拡散と収束」の構造を採用し、まずは各委員からイメージするアイデアや課題を出し合い、各委員やその関係者が携わっているプロジェクトを発表した。これを「拡散」の作業とし、情報の担保を行った。そこでは、「子どもたちの創造性を育む」というテーマについて、八尾商工会議所青年部が実施している「ジュニアエコノミーカレッジ」が出た。「農地の活用」については、「休耕地を利用した農のテーマパークが出来ないか」といったアイデアも出た。また、「コミュニティとしてのみせるばやお」については、「中高生に役立つイベント」の提案があった。

そして、最終的にはこれらを「収束」させ、解決策を導きだすという一連の流れが今期の実証実験の基本プロセスである。





（３）各キーワードのゴール設定（令和４年度 第１、２、３回検討会議）

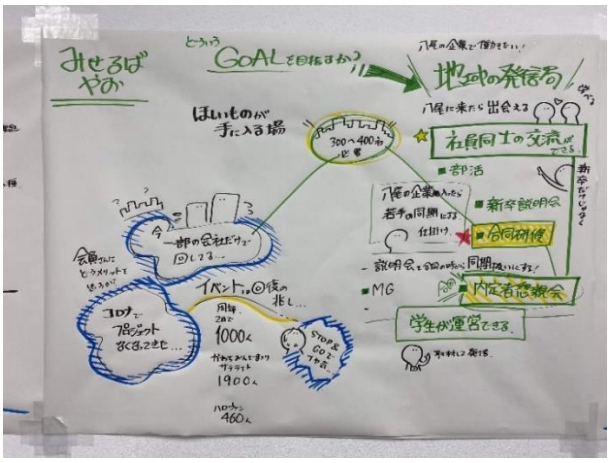
検討部会では、どのような状態がゴールなのかを定めるため、３つのキーワードについて更に深掘りして検討を重ねた。まず「農地の活用」のゴールについては、「マイホームのようにマイファームを持ってることがかっこいい、ステータスになるような価値観を持つ」こととした。次に「子どもたちの創造性を育む」については「八尾は起業家が生まれるまち・商売を教えるまち・色んな大人に出会って選択肢が増える・チャレンジした人を笑わず応援するまちにしたい」とし、「コミュニティとしてのみせるばやお」については「就活生や社会人に<ほしいものが手に入る場所> という認識を持ってもらう」とした。

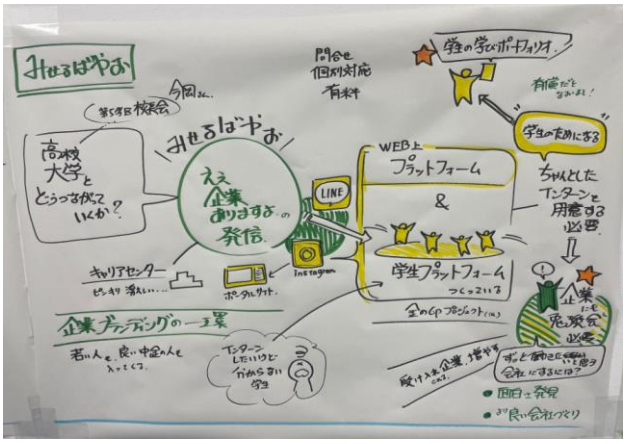
また、「子どもたちの創造性を育む」については小中学校向けに出張講座を行うといったアイデアが出て、それに伴い『提言書の別冊（第３章）』の案が出た。

（農地の活用）

（子どもたちの創造性を育む）

（コミュニティとしてのみせるばやお）

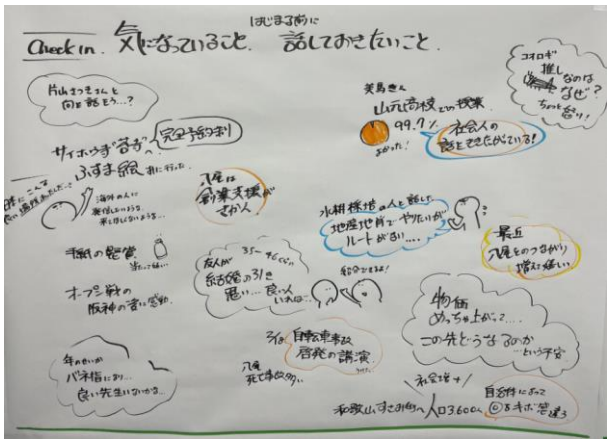




（４）提言書の作成に向けた情報共有（令和４年度 第３回本体会議）

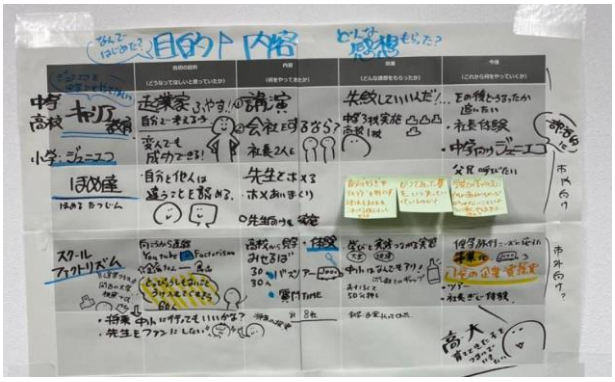
第３回本体会議では、検討部会で出てきた内容を元に整理を行い、次年度の提言書の作成に向けて懸念点等を共有した。なお、以下３つのキーワードについて詳細を記載する。

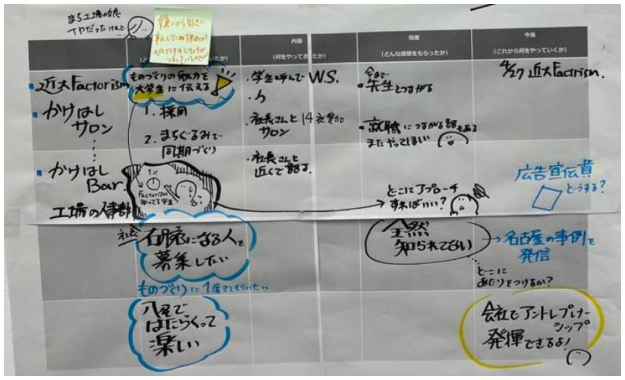
「農地の活用」について、「経営としては難しい。求めるけれど、だからと言って産業に持っていくには難しい」「空き家活用などは話題にあがるが、八尾市が農地活用を考えていることが素晴らしい」「スケール感がイメージできない、商いとしてはメリットあるのか不明」となった。続いて、「子どもたちの創造性を育む」については「出張講座の実施」「小学校により温度差がある。熱量の高い学校に当たればいいが、そうじゃない場合もある。これらも今後考えていく必要がある。」「子どもたちが住み続けたいまち、働き続けたいまちになってほしい。」「学校現場の先生が大変であることも、理解した方がいいかもしれない。」「産業と教育とが結びつくことによって、もっと未来は明るくなる。」等の整理となった。そして「コミュニティとしてのみせるばやお」については、「八尾はチャレンジできるまち、チャレンジした人を応援できるまちにする。」で確定した。



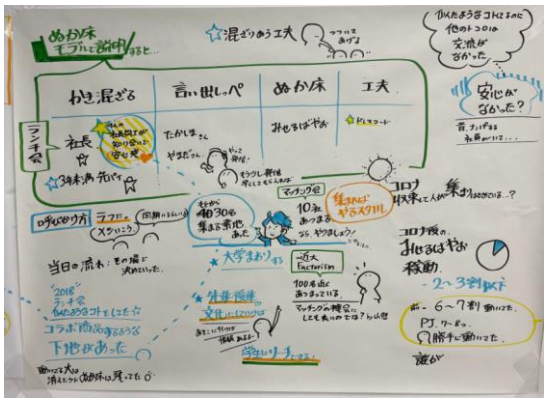
（５）実証実験の分析と提言書の骨組み構築（令和５年度 第１、２、３回検討部会）

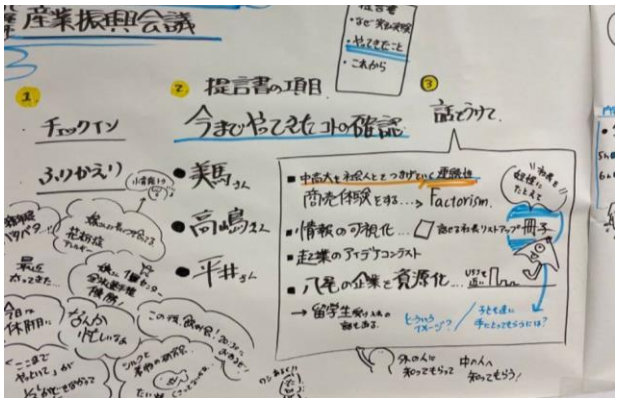
令和５年度　検討部会では、委員などが行っている活動も、やお糠床モデルの実証実験として位置付けられ、これらの実証実験の位置づけとしての各活動を目的、内容、効果、今後の４項目に分けて分析を行った。



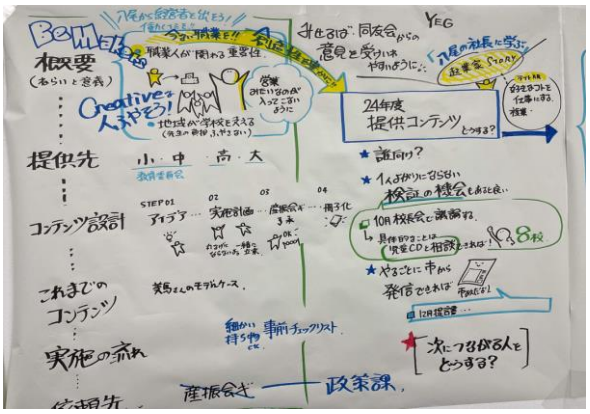


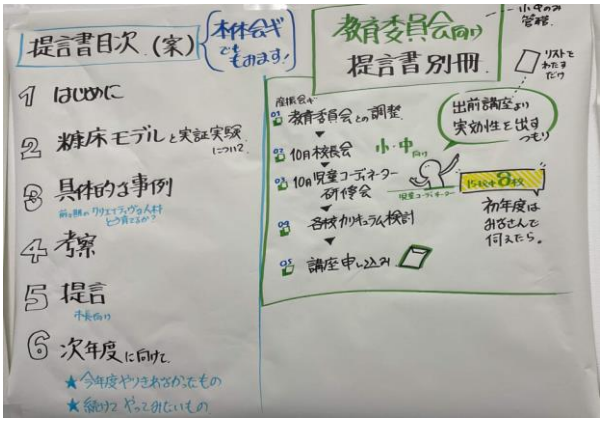
なお、第２回検討部会では、みせるばやおで実施された「新人社員ランチ会」が実施され、その結果について報告・共有を行う等、具体的な実証実験の位置づけが次々にピックアップされた。





そして第３回検討部会では、これらの内容を踏まえた提言書の作成をするにあたり、提言書の目次について検討し、骨組みの構築を行った。またそれと同時に学校向けの資料（第３章）も作成に向けて本格的に動き出した。次回、本体会議では、小学校の校長先生が委員となっていることから意見を伺いそれをフィードバックする予定とした。





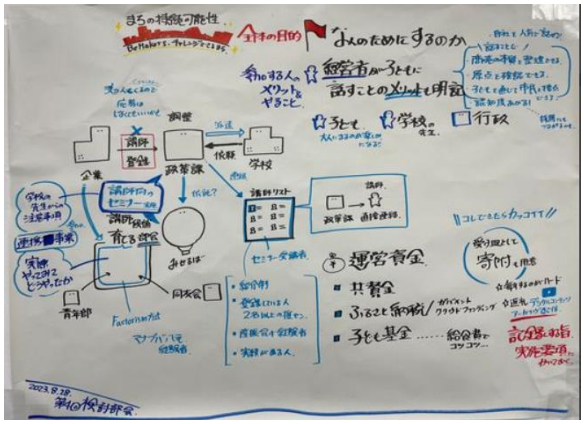
（６）提言書の基本構成と学校向け資料の検討（令和５年度 第１回全体会議）

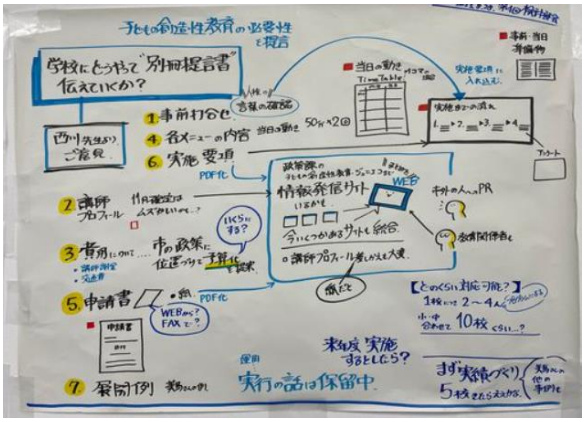
令和５年度の第１回本体会議では、提言書の作成に向けて本格的な作業を開始した。提言書の基本的な構成要素を明確に定め、目次の承認を行った。

加えて、出張講座を記載した学校向けの資料について、小学校の校長先生である委員から多くの貴重な意見がでた。

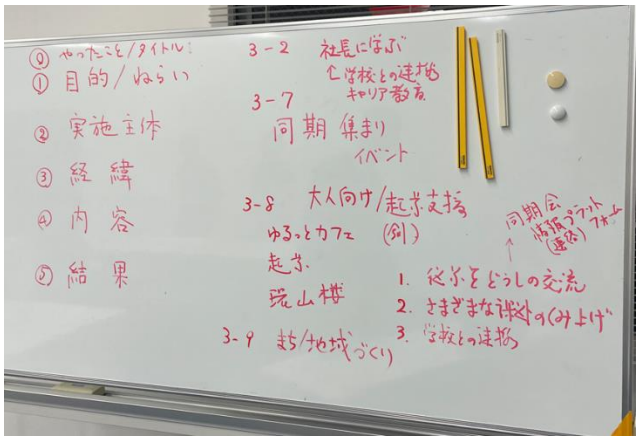
（７）学校向け資料の最終確認と出張講座スキームの強化（令和５年度 第４，５回検討会議）

委員の意見を学校向け資料にフィードバックし、講師のプロフィール等を追加し、具体性を持った学校向けの資料の作成及び出張講座実施のスキームを構築した。また、これらにおいて次年度に継続可能な仕組みとして、協賛金の募集やクラウドファンディングの実施を考案し、出張講座の更なる土着化を図った。



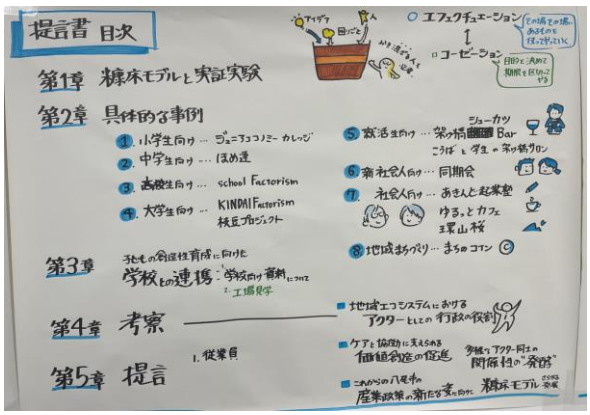


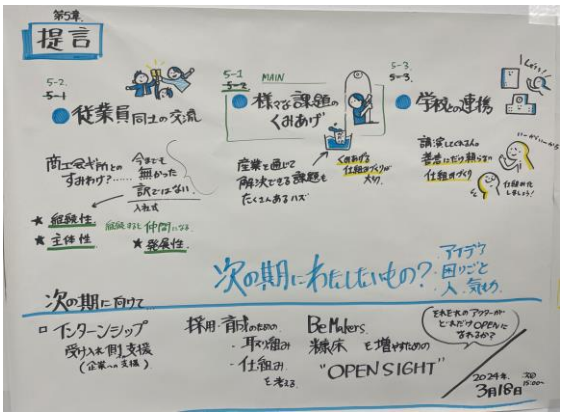
その後、第５回検討部会では学校向け資料の最終確認を実施し、提言書に関する詳細な説明に進んだ。



（８）提言書の内容確認と各世代向けメッセージの策定（令和５年度 第２回全体会議）

提言書の内容を固めていき、この２年間で議論してきた内容を提言書案としてまとめ、内容の確認をした。 提言内容で印象に残っていることや追加したい内容などを話し合った。また、今回対象となる各世代に向けてメッセージ内容を考え、メッセージの作成することが決まった。





今期の産業振興会議において、基本的なスタンスとして「コミュニティ参加への支援と醸成」「働くことの楽しさを伝えるためのコンテンツ制作と仕掛けづくり」「挑戦する人を育てる」という 3 つが浮かび上がった。これは、2018-2019 年度の産業振興会議の提言書で打ち出された「Be Makers！」というコンセプトを具体化するものであり、2020-2021 年度の産業振興会議で提唱された「やお糠床モデル」において具現化していきたい方針となるものである。

これらの方針を具現化する領域・テーマとして、産業振興会議での議論を経て「子どもたちの創造性を育む」「農地活用」「コミュニティとしてのみせるばやお」という 3 つのテーマを採り上げようということになった。このうち、「農地活用」は農産連携や第 6 次産業化といった観点、さらに遊休農地の活用などの点で、地域の価値創造にとってきわめて魅力的かつ重要であるという認識が共有された。ただ、このテーマは関係するステイクホルダーがきわめて多岐にわたることもあって、継続的にアイデアを出し、実証実験の可能性を探るということになった。

残る「子どもたちの創造性を育む」「コミュニティとしてのみせるばやお」という 2 つのテーマに関しては、すでに着手している実験的試みもあることから、限られた期間のあいだでも具体化しやすいという点で、今期において実証実験を行っていくことになった。

実験のプロセスとしては、以下の 6 点を確認し、具体化を図った。

1 アイデア：どういうゴールをめざしたいのか
2 誰の資源を活用するのか：協力をお願いする人やモノを明確化する
3 どういう手順でやるのか：流れを共有する
4 何が必要になるのか
5 めざしている状態にどれくらい近づいているか：数値だけでなく、質的なデータでも確認する
6 どのくらいの期間で実施するのか

このうち、6 については、継続的な案件が多かったために、特に定めずに展開しているものが少なくない。ただ、1 年ごとに一定の成果を確かめることは可能なので、これによって進捗や展開を検証

していく方針を採った。ここに記載されているプロセスは、前述のコーゼーション的な色彩が濃く、現実の実施にあたっては、状況適応的に、より実り多い方法に変更することをいとわなかった。

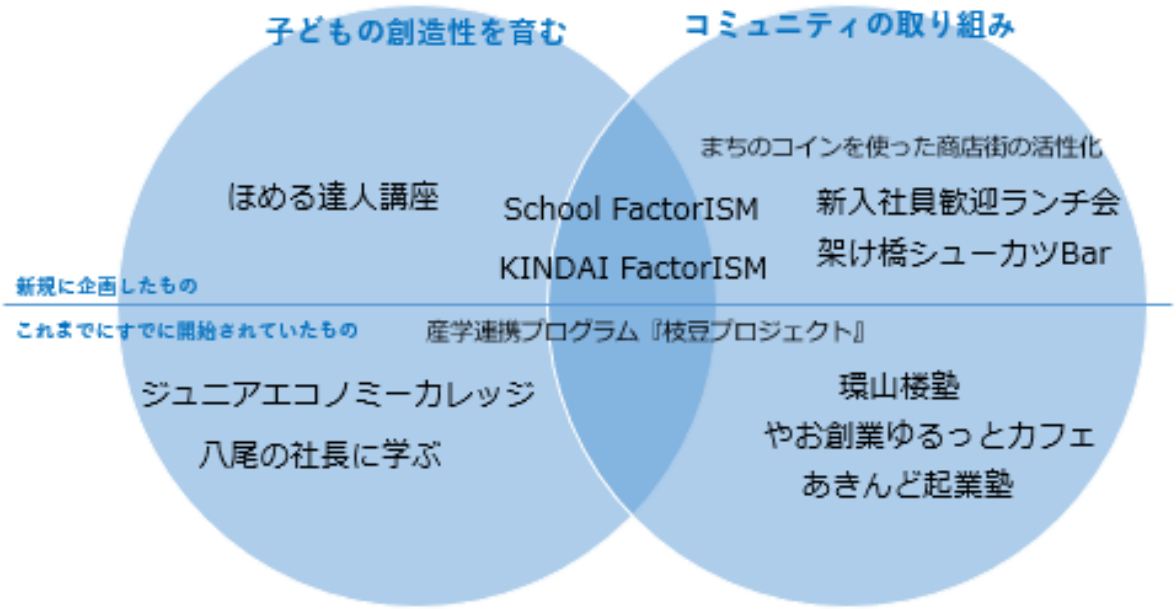
実験を企画していったプロセスについては、紙幅の関係もあり省略するが、「子どもの創造性を育む」においては八尾市教育委員会や八尾市立小・中・義務教育学校の校長会の多大な協力を得て、2024年度から制度的に実施することが可能になったほか、「コミュニティとしてのみせるばやお」に関しても、参加企業の協力を得て、多様な世代での交流を促進する試みをスタートさせることができた。これらの具体的な内容については、第２章において説明する。

第２章　具体的な事例について

本章では、「やお糠床モデル」の“糠床をかき混ぜる”、“糠床にかき混ざる”、といったプロセスから生み出される「誰ができるか」「誰と一緒にやっていけるか」といった視点を持って考察する。そこでは、市民や企業、諸組織、諸団体の自発的活動の様々な効果や課題について言及するとともに、偶発的に発生する出来事の有効性についても述べる。

事例については、①新規に企画したものとこれまでにすでに開始されていたもの② 2 つのテーマ「子どもたちの創造性を育む」「コミュニティの取り組み」③取り組みの対象となる世代、ごとに分類している。②について、「コミュニティの取り組み」としているのは、コミュニティについての取り組みが、「みせるばやお」の活動に限らず市内各団体が取り組んでいる事例があり、実証実験として有用であることから、今回汲み上げたいと考えたものである。（①②の分類については、下図参照）

このように分類したのは、新規に企画したものについては、継続実施に必要なものを探索するためであり、これまでに開始されたものは、これまでの課題と新たな考え方を発見することが求められるためである。また、地域全体での価値創造をめざすために、世代ごとに分類し、幅広い世代に向けた取り組みが実施されるかを検証するためである。



2-1　小学生を主な対象者とした取り組み

■ジュニアエコノミーカレッジ

テーマ		子どもたちの創造性を育む
1	目的	地域の将来を担う子どもたちに、商売体験を通じて働くことの意義、コミュニケーション能力やリーダーシップ、チームで協力し合いながら成し遂げることの大切さを学んでもらい、「自ら決めて行動できる人材」を育成する。
2	実施主体	八尾商工会議所青年部
3	経緯	現在の子どもたちは、IT の発達により、さまざまな情報を容易に入手でき、多くの知識を持っている。しかし、その知識を活かす経験が不足しているため、実際に商売体験を通じて、子どもたちに経済や社会を身近に感じてもらいたいと考え、八尾市の地域社会において、若い世代に実戦的な経験を提供し、将来のリーダーや起業家を育成するために開始された。
4	内容	八尾市の小学校 4～6 年生を対象にした企業教育プログラムで、夏休みを利用して子どもたちが経済活動を学ぶことができる環境を提供している。参加者は５人１組のチームを作り、仕入れから製造、販売、決算、納税に至るまでのビジネスサイクルを経験し、銀行や証券会社役の職員や保護者に対して、事業計画に基づいたプレゼンテーションを行い、事業を展開させる体験をする。
5	成果	子どもたちはプログラムに積極的に参加するようになり、初めは消極的だった子どもたちも主体的になり、参加者の態度に変化が見られた。さらに、一部の子どもたちは将来的に企業経営者になることを志すようになるなど、子ども達のマインドについての影響も観察されている。
6	「やお糠床モデル」の視点による考察	この取り組みは、子どもたちが経済や社会に関する理解を深め、創造性を育むことに寄与しており、将来の担い手としての成長を即している。しかし、この取組は即席で結果が出るものではなく、成長した子どもたちがその後どういった経過をたどるのか見届ける必要があり、さらには成長した子どもたちが糠床にかき混ざることでエコシステムが醸成すると考える。

2-2　中学生を主な対象者とした取り組み

■ほめる達人講座

テーマ		子どもたちの創造性を育む
1	目的	人間関係のスキルは、小中学生から将来の社会人のキャリア全体にわたり継続的に役立つものとして子どもたちに伝える。例えば、最上級の褒め言葉として「ありがとう」の意義を強調する従来の「すみません」という言葉を、「ありがとう」に変換することにより、日常のコミュニケーションの質が向上する可能性がある。
2	実施主体	美馬 功之介（日本ほめる達人協会　特別認定講師　美馬　功之介）
3	経緯	昨今、多くの人々が日常的に様々な人間関係のトラブルや摩擦に直面するという課題が存在しており、職場の同僚や顧客との関係、学校内の友人関係など多岐にわたるシチュエーションの中で、人間関係の難しさがある。人を「ほめる」ことで、目の前の小さな価値を見つける大切さや短所も前向きに捉えることにより、周りとのコミュニケーションも円滑になり、自己肯定感も向上する。
4	内容	「ほめる」行為には、相手の特性や行動を深く理解することが不可欠である。例えば、一般に優柔不断と評される性格特性も慎重に物事を考えられるという視点から評価することができる。このように物事の長所を見出す習慣を養い、相手の価値を明確に伝えることは、有効なコミュニケーション手法として重要である「自分が言われたい褒め言葉は何か？」という問いを子どもたちに提示することで、一般に認識されている特性や褒め言葉に対する意義の深化が期待される。
5	成果	他者を褒めるという行為を学ぶことから、褒める技術というよりも、目の前の人や出来事に対し独特の視点でその真の価値を見つけ伝達する能力の育成を培うことができる。将来社会人としての人間関係構築や管理のスキル向上に直接寄与することが期待できる。
6	「やお糠床モデル」の視点による考察	この取り組みは、「やお糠床モデル」における協働に根ざした取り組みといえる。子どもたちの自己肯定感につながる実践的教育を行いたい学校と、地域貢献につながる経営者の取り組みが協働により生み出された事例である。

■八尾の社長（経営者）に学ぶ

テーマ		子どもたちの創造性を育む
1	目的	子どもたちに自分のキャリアについて考えるきっかけを与えることを目的とし、子どもたちの将来の可能性を広げることをめざす。
2	実施主体	美馬 功之介（株式会社 MIMA　代表取締役）
3	経緯	将来に夢を持てない子どもたちが増えている現状を踏まえて、八尾の中学校において実施。創造性教育に興味のある熱心な経営者たちが授業に登壇することを決め、子どもたちに普段とは違う学びを提供する機会となった。
4	内容	授業の内容は、グラフィックレコーディングを用いた講演の実施や 8 人の経営者が各クラスに分かれ、生徒たちと共に将来の仕事についてのアイデアを深く掘り下げるワークショップを行った。
5	成果	授業を通じて、子どもたちは新しい仕事のアイデアを積極的に考え、多くの才能が発掘されました。子どもたちだけでなく、教員や講師たちにとっても、充実した経験となり、授業は楽しく学ぶことができる場となった。
6	「やお糠床モデル」の視点による考察	積極的に子どもたちの教育に関わりたいという地域の経営者の想いと、キャリア教育の必要性を感じている学校とがつながったことにより実施された取り組みである。この取り組みは、一部の経営者の取り組みにとどまらず、産業振興会議の「糠床」で、かき混ざることによって、継続できる仕組み作り、コンテンツの作成といった第３章で紹介する実証実験へとつながったものである。

2-3　高校生を主な対象者とした取り組み

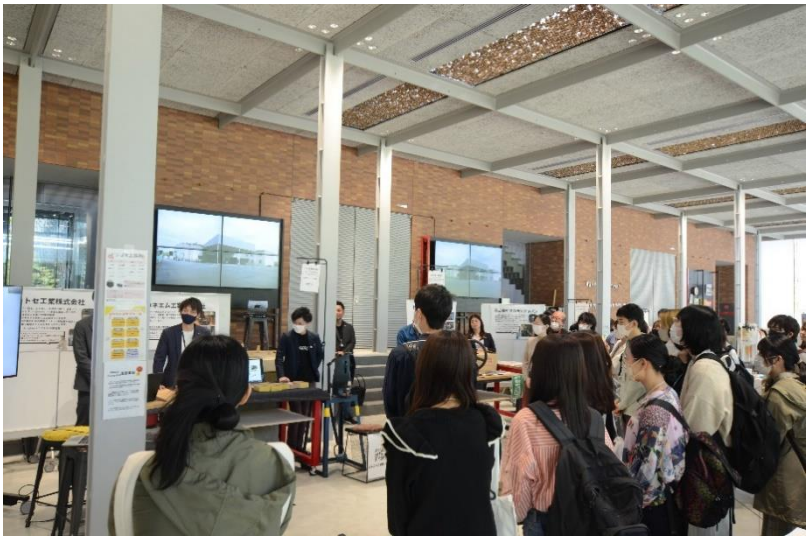
■School FactorISM

テーマ		子どもたちの創造性を育む　/　コミュニティの取り組み
1	目的	リアルな体験を通じて得られる知識や経験は、教科書だけでは得られない理解や感覚を養成するための鍵となると考えており、実際の工場見学を通じて、生徒たちは多様な企業文化や働く人々の熱を体感し、その中での発送の自由さや問題解決の方法に触れてもらい、中小企業への就職も進路の一つとして考えてもらう。
2	実施主体	みせるばやお
3	経緯	愛知県の高校から「みせるばやお」に対して、八尾市内企業の工場見学及び「みせるばやお」の活動について知りたいと依頼が来た。「みせるばやお」につながったきっかけは、学校の先生が過去の FactorISM の YouTube を見て興味を持ち、「みせるばやお」の会員で FactorISM にも参加している企業に直接連絡したことである。高校からは、高校生の将来の選択の一つとして、中小企業にも目を向ける必要があると感じ、「みせるばやお」及び FactorISM の活動について視察を申し入れ、それを「みせるばやお」が受けたのである。
4	内容	「みせるばやお」の活動に関して、「みせるばやお」の理事が説明を行った後、生徒を３グループに分け、市内企業の工場見学を実施。そこで、工場見学では実際に作業風景を間近に見学ができ、中小企業のものづくりの技術力の高さに触れてもらう機会となった。
5	成果	大阪府外の高校生に対しても、八尾市内企業の技術力や魅力をアピールすることができた。高校生が工場見学を通じて、中小企業の現場に触れることで、より具体的な中小企業の実態を知ることが出来た。また、参加した高校生から熱心に多くの質問がなされるなど、有意義な時間となった。また、受け入れを行った企業も、自社の PR を発信する機会となった。
6	「やお糠床モデル」の視点による考察	この取り組みが始まったきっかけは、高校の先生が FactorISM の YouTube を見て興味を持った「偶然」である。この取り組みにおいては、積極的な情報発信の重要性を示している。自社の活動や取り組みについて、積極的に情報発信をすることで、これまでリーチできていなかった範囲に対してもアピールでき、それが新たな価値創造につながると考えられるため、こういった情報発信が重要と示す事例である。

2-4　大学生を主な対象者とした取り組み

■近畿大学×FactorISM

テーマ		子どもたちの創造性を育む　/　コミュニティの取り組み
1	目的	大学生に対して、中小企業やものづくりに触れることにより、中小企業やその技術力に対する理解を深め、新たな将来の選択肢の一つと出会える場とする。
2	実施主体	みせるばやお
3	経緯	現状、中小企業の採用活動は非常に厳しい状況にあり、新規採用になかなか繋がらない。そういった状況の中、近畿大学の先生や学生とつながる機会があり、そこから近畿大学と連携して、実体験を通じて伝統的なものづくりの重要性や魅力を若い世代に伝える場を提供していくことにつながった。
4	内容	近畿大学内の THE GARAGE にて、ものづくりワークショップイベントを開催。八尾市に拠点を置くものづくり企業が参加し、学生たちに向けて個性豊かなワークショップを実施。デザインを自分で考えるオリジナルのトートバッグ製作やジーンズのボタンを使用したオリジナルマグネット制作などを実施した。
5	成果	今年度、KINDAI FactorISM は複数回実施し、多くの学生が参加した。参加した学生は、実際のものづくり体験を通じて、ものづくりの深い魅力や、その中に潜む企業それぞれにある独自の技術を体感し、ものづくりの魅力に気づく機会となった。
6	「やお糠床モデル」の視点による考察	参加した学生の中には、実際に就職活動に向けた動きを行っている者もおり、参加企業にとっては自社を PR するのに最適な機会となっている。就活生以外ももちろん多く参加し、参加企業は多くの学生と接点を持つことが出来ている。この取り組みは、将来的な八尾市外から八尾への就職につながる可能性がある。そうなると、新たな「かき混ざる人」や「かき混ぜる人」が八尾市に増え、新たな価値創造につながる可能性が広がる。



■産学連携プログラム『枝豆プロジェクト』

テーマ		子どもたちの創造性を育む　/　コミュニティの取り組み
1	目的	八尾市の特産品を利用して地域経済を活性化させ、地域コミュニティを強化すること
2	実施主体	大阪府中小企業家同友会 八尾支部
3	経緯	大阪府中小企業家同友会 八尾支部にて「ものづくり部会」が発起され、八尾市の活性化をめざして様々な活動が開始されました。その中で、八尾市内に所在する大阪経済法科大学と大阪府中小企業家同友会 八尾支部が連携し、八尾の未来のために地域の特産物や文化を通して様々な業界を盛り上げていく地域貢献活動としてスタートした。特に、八尾市の特産品である枝豆を使用した新商品開発に力を入れている。
4	内容	このプロジェクトに参加する学生たちは、まずは自分たちが販売する商品を知るため、八尾枝豆やクラフトビールについて調べ、枝豆の生産現場やクラフトビールの製造現場にも足を運び、大学で学んだマーケティングや行動経済学も取り入れながら「枝豆ビール」の開発から販売まで行ってきた。また、定期的に中小企業同友会のメンバーとも打合せを行い、経営者視点の考え方も取り入れながらプロジェクトを進め、実際に八尾河内音頭まつりなどでも販売した。
5	成果	参加する学生が新商品の開発から販売価格の設定、広報、予算管理などすべてを行った「枝豆ビール」は八尾河内音頭まつりで販売され、枝豆ジェラートは東大阪ふれあい祭りで販売された。これにより、企業と学生が連携した取り組みとして、地産地消・地域活性化を実現した。
6	「やお糠床モデル」の視点による考察	本プロジェクトは、これまで継続的に実施されてきたが、担い手不足が課題となっており、今後、持続可能なものとしていくためには行政との協働も必要になってくる。「やお糠床モデル」においては、各団体がもつ課題を、糠床に参加する団体が持っている能力などで解決し、新たな可能性を生み出すものである。行政と協働することで、担い手不足の解消のみならず、新たなアイデアや取り組みにつながる可能性もある。

2-5　就活生を主な対象者とした取り組み

■架け橋シューカツ Bar

テーマ		コミュニティの取り組み
1	目的	企業の実態を深く知ってもらい、入社後のミスマッチングによる早期退職を減少させる。
2	実施主体	こうばのじんじぶ
3	経緯	昨今、学生が容易に企業情報をインターネットで入手できるものの、企業の実態を深く理解する機会は不足している。特に中小企業や町工場の魅力が十分に伝わらないため、企業と学生の間で相互理解が不足していることが早期離職の一因となっている。企業は、堅苦しい面接では相互理解が生まれにくいと感じており、本音で会話できるような環境が必要だと考える。
4	内容	通常の就活の場では、形式的な面接や企業説明会における一方的な情報提供が中心となりがちだが、企業の経営者が蝶ネクタイを着用し、バーテンダー役になったカジュアルバーという環境での直接的な対話を行ない、就活生のリアルな声を聞き出す機会となった。
5	成果	学生と企業の間に新しい関係性を築くことができ、課題解決するための新しいアプローチとして非常に有効であった。
6	「やお糠床モデル」の視点による考察	この取り組みは、企業が抱える「人材のミスマッチング」「早期離職」といった課題に、企業同士が取り組むことで実施されたものである。この取り組みが実現したのは、「やおの糠床」に各企業が抱える課題を入れ、「みせるばやお」のコミュニティを活用しながら、「かき混ぜる」アクターが参加し、各企業の課題が「かき混ざる」ことによって、生み出された事例である。

2-5　新社会人を主な対象者とした取り組み

■新入社員歓迎ランチ会

テーマ		子どもたちの創造性を育む
1	目的	中小企業の新卒採用はどうしても人数が限られるため、同期が少ない。八尾市の中小企業の同期という広い枠組みで同期を作り出し、仕事に対するモチベーション向上を促進し、離職率を減少させる。
2	実施主体	こうばのじんじぶ
3	経緯	中小企業１社だけでは新卒採用が難しく、自分と年代の近い若手社員、同期入社の社員も少ない。八尾市には中小企業が多く集まっており、そこには同年代の若手社員は必ずいる。そういった人たちを集め、「八尾市全体で同期」とし、つながりを作ることで、普段交わることが無かった社員同士でコミュニケーションが生まれる。こういったつながりにより、少しでも離職率を下げ、八尾市のものづくり人材として定着してもらう取り組みとしてスタートした。
4	内容	まずは、中小企業９社から約 30 人の新入社員および若手社員が集い、みせるばやおで交流会が開催された。各社１名から５名ほどの参加となった。これにより約 30 人の仲間となり「集まれば強し」という「こうばのじんじぶ」の考え方が現れた活動となった。
5	成果	当日は、若手の社員は覚えたばかりの知識を使って自社の説明を行った。これにより、参加している企業の事業内容を各参加者が把握でき、よりそれぞれが身近な存在となった。また、今後の取り組みについても参加者から具体的な案がでたりするなど、参加者同士の繋がりが生まれ、今後の発展を期待させるものである。
6	「やお糠床モデル」の視点による考察	この取り組みは、新入社員などの若手社員のモチベーション向上を図るとともに、同期がいることの一体感から早期退職を防げる可能性もある。また、若手社員を通して中小企業同士の横のつながりが生まれ、将来の産業振興に寄与すると考えられる。しかしながら、本プロジェクトにおいても、「かきまざる」役割を果たす者が少なく、今後さらに発展するためにも産業振興会議の糠床に漬かることが重要であると考える。

2-6　社会人を主な対象者とした取り組み向け

■あきんど起業塾

テーマ		コミュニティの取り組み
1	目的	八尾市内で創業を考えている人を対象に、開業前から開業直後期までの支援を行うことにより、地域商業の活性化を促す。
2	実施主体	八尾市　産業政策課
3	経緯	開業前から開業直後期までの支援を行うことが、円滑に創業するためのノウハウを身につける過程として必要とされるため実施。
4	内容	講義では経営の基本を理解してもらい、その知識などを活かして授業を行う。さらに、八尾市の創業支援メニューを紹介し、それぞれの開業段階に応じたコースが準備されており、開業準備の基礎からビジネスプラン設計までを学ぶ。実践編では、開業前後の財務や店舗レイアウトに関する専門的アドバイスが得られる。
5	成果	段階別のコースを設定することで、市内で実際に起業する事業者も輩出している。加えて、受講した同期生・卒業生が繋がり、事業者同士が連携して広報・集客・イベント実施（みせるばやお等を活用）するなど、新しいイノベーションに繋がる取り組みが生まれている。
6	「やお糠床モデル」の視点による考察	「やお糠床モデル」は地域全体の価値創造をめざすモデルであり、創業を考えている人が抱えている課題や問題を地域全体で解決する視点から、先輩経営者がメンターとなって創業者にアドバイスする取り組みとなっている。また、この取り組みにより起業した人が経営者となりメンターになることで、イノベーションエコシステムが生み出される事例でもある。

■やお創業ゆるっとカフェ

テーマ		コミュニティの取り組み
1	目的	八尾市内で起業・開業を検討している人が、起業に対する疑問や不安を先輩起業家に気軽に話し、また、先輩起業家の体験談を聞き、同じ悩みを持った仲間とのネットワークづくりも可能とする。
2	実施主体	八尾市　産業政策課
3	経緯	本格的な個別面談やセミナーに参加するのではなく、まずは気軽に相談や交流ができる場として、やお創業ゆるっとカフェがスタートした。
4	内容	八尾市内で起業して間もない方を講師としてお招きし、実際に経験した大変だったことや良かったことなどを実体験として話してもらう。また、交流会では、起業に対する疑問や不安を先輩起業家と意見交換でき、同じ悩みを持った参加者同士がつながる場にもなっている。
5	成果	先輩起業家との意見交換を通じて、企業に関する疑問や不安を解消する機会となった。結果として、これらの交流は起業家の不安を減少させ、自信と実行力を高め、長期的には持続可能なビジネスモデルの構築に寄与した。先輩起業家や参加者との意見交換を通じて、起業に関する疑問や不安を解消する機会となった。 加えて、金融機関等の支援者との接点、行政による起業塾等の実践的カリキュラム参加へのきっかけにもなっている。多様な参加者により構成されるコミュニティでもあるため、結果として、自信と実行力を高め、長期的に持続可能なビジネスモデルの構築に寄与した。
6	「やお糠床モデル」の視点による考察	この取り組みは、八尾の糠床に入るためのきっかけづくりの場として機能している。参加者が増加することにより、糠床に参加するメンバーが増え、それぞれの課題や問題を解決するためのアイデアなども出やすくなるため、「やお糠床モデル」を機能させるためにも、今後も積極的に参加者を増やす取り組みを行っていくことが必要である。

■環山楼塾

テーマ		コミュニティの取り組み
1	目的	経営者・経営幹部・後継者など次世代経営者等に人材育成プログラムを実施することで、円滑な事業承継と次世代リーダーの育成に向けた企業への支援を行い、地域経済の活性化を図る。また、経営者間のコミュニケーションを通じて、経営課題の解決や連携のきっかけづくりも目的の一つである。
2	実施主体	八尾商工会議所　八尾市　産業政策課
3	経緯	昨今、事業承継が大きな問題となっており、事業承継が行われないままに、その事業所の技術や雇用などが失われるのは、八尾市の衰退にもつながっていく。八尾市の「産業集積の維持・発展」を図っていくために、円滑な事業承継が重要となってくると、過去の産業振興会議でも指摘を受けている。こういった状況から、イノベーションを創出する人材の育成や円滑な事業承継、地域産業を牽引するような次世代を担うリーダーを育成することも目的にスタートした。
4	内容	八尾市内に事業所のある経営者・経営幹部・後継者を対象に、自社の課題解決や新事業創出を目的にイノベーションを創出する力を身につける人材育成プログラムを実施。また、講座受講後も環山楼塾 OB 研究会という受け皿があり、自主的に継続して活動を続けている。
5	成果	現在に至るまで八尾市で活躍する経営者を数多く輩出している。また、その経営者が OB 研究会として活動し、後進の育成にも積極的に取り組むことにより、事業承継者同士の横のつながりや相互支援や情報共有が促進されている。また、八尾市や各地域の各種団体の重役を担うなど、地域にそしてまちづくりに大いに貢献している。
6	「やお糠床モデル」の視点による考察	環山楼塾 OB 研究会の活動においては、他のコミュニティに所属する経営者が講師として登壇しているケースがある。これは、環山楼塾で出たアイデアや問題に対して、環山楼塾の塾生や OB がそれぞれのコミュニティにそれらを持ち帰り、それらを解決するために各コミュニティのつながりを活用して、新たな解決策を出していると考えられる。 このように、各コミュニティ単体ではなく、他のコミュニティと糠床を共有・混ざることで、今までは出せなかった解決策を生み出すことも可能で、また市場に新しい価値を提供するような新規事業の創出も期待できると考える。

2-7　地域まちづくりを主な対象とした取り組み

■まちのコインを使った商店街の活性化

テーマ		コミュニティの取り組み
1	目的	八尾市のコミュニティ通貨である「まちのコイン」を活用して、商店街の経済活動を促進し、地域社会の活性化を図る。また、商店街におけるゲームチェンジャーを見える化し、さらなる活性化につなげていく。
2	実施主体	商店街各店舗
3	経緯	地域住民に買物の場を提供してきた商店街は、買物の場としての商店街の位置づけは、徐々に低下してきている。そんな中、商店街のある店舗の経営者から、イベントでまちのコインを使いたいと依頼があった。その方は、以前からまちのコインを知っており、商店街や地域活性化に使用できないかと考えていた。そんな中、「まちのコインを使ってイベントを盛り上げたいから手伝ってほしい。」と八尾市に依頼があり、イベントでの企画や運営まで八尾市が伴走支援を行った。
4	内容	商店街が定期的に実施されるイベントでコミュニティ通貨「まちのコイン」を導入した。具体的には、各店舗をまちのコインのスポット（コインがもらえる場所）に設定し、さらにそのスポット同士をつなぎ、デジタル上でのスタンプラリーを実施することで、誘客を図った。
5	成果	まちのコインの効果もあり、多くの人がイベントに参加した。それ以上に、商店街の店舗に効果を実感し、イベント終了後、まちのコインを活用した取り組みを積極的に行い、商店街の活性化に取り組んでいる。実際に、イベント以降も、商店街の店舗には多くのまちのコインユーザーが来場し、商店街に人流が生まれている。
6	「やお糠床モデル」の視点による考察	今回の成果は、商店街内にゲームチェンジャーと呼ばれる人物がいたことが非常に大きい。この人がいたことで、商店街内でのまちのコインの導入もスムーズで、イベント自体も盛況に終わった。 やはりこういったゲームチェンジャー＝かき混ざる人を地域にどのように増やしていくかが重要である。今回は、この商店街でのかき混ざる人がどんどん増えていくことで成功している、これを他地域にどのように展開し、広げていくかが今後の課題である。

第３章　子どもの創造性育成に向けた学校との連繋：学校向け資料について

産業振興会議において、テーマの一つである「子どもたちの創造性を育む」ための実証実験導入について議論を行ってきた。産業振興会議を「やおの糠床」と捉え、次世代を担う子どもをどう育てるか、といった課題を糠床に入れ、カテゴリーの違うメンバーがアクターとなり「かき混ぜる」「かき混ざる」ことによって、「挑戦することがかっこいい」「将来を想像していくのは楽しい」風土を八尾市に醸成していくという方向性や、「次世代を担う子どもたちがチャレンジすることを応援するまちにしたい」という想いが出された。

また、議論の中で下記の３つの視点に基づき、意見の整理をはかった。

①子どもたちの想い…「将来、何になりたいかわからない。」「社長ってすごい人しかなれないのかな。」「失敗することがこわい。」

②経営者の想い…「就職してもすぐ離職してしまう。」「将来を見据えて地元の子どもたちのキャリア教育に貢献したい。」

③学校現場…「学校の先生は忙しくて新しいことに手が回らない。」「単発での実施ではなく仕組みを構しないと持続的な実施は困難。」

これらの意見を汲み取り、「子どもたちの創造性を育む」ためには、下記に示す「対象」と「内容」に基づく「実証実験をする」という「解」（結果）を導きだした。

・対象・・・市内小学校・中学校・義務教育学校

・内容・・・経営者が学校に出向いて子どもたちに直接伝えることができる「出張講座」
まちの工場や店舗などを見学して現場を体感できる「現場見学（Open Site）」

これらの実証実験を得て、地域の経営者と地域の子どもとがつながる機会が少ないことが判明した。地域の経営者からの学ぶ機会をつくることは、子どもの頃から起業家教育を受ける機会となる。さらに、子ども達の成長段階に併せて、継続的に活動を続けていくことで、その子ども達が大人になり、子どもの頃の夢を持ち続け、夢を実現しようとするチャレンジを地域の経営者が応援（投資）する未来につながる取り組みとなる。また、先輩経営者が後輩（地域の子どもたち）を育てる「学びの好循環」が絶えず生まれ、イノベーションエコシステムにつながるものである。

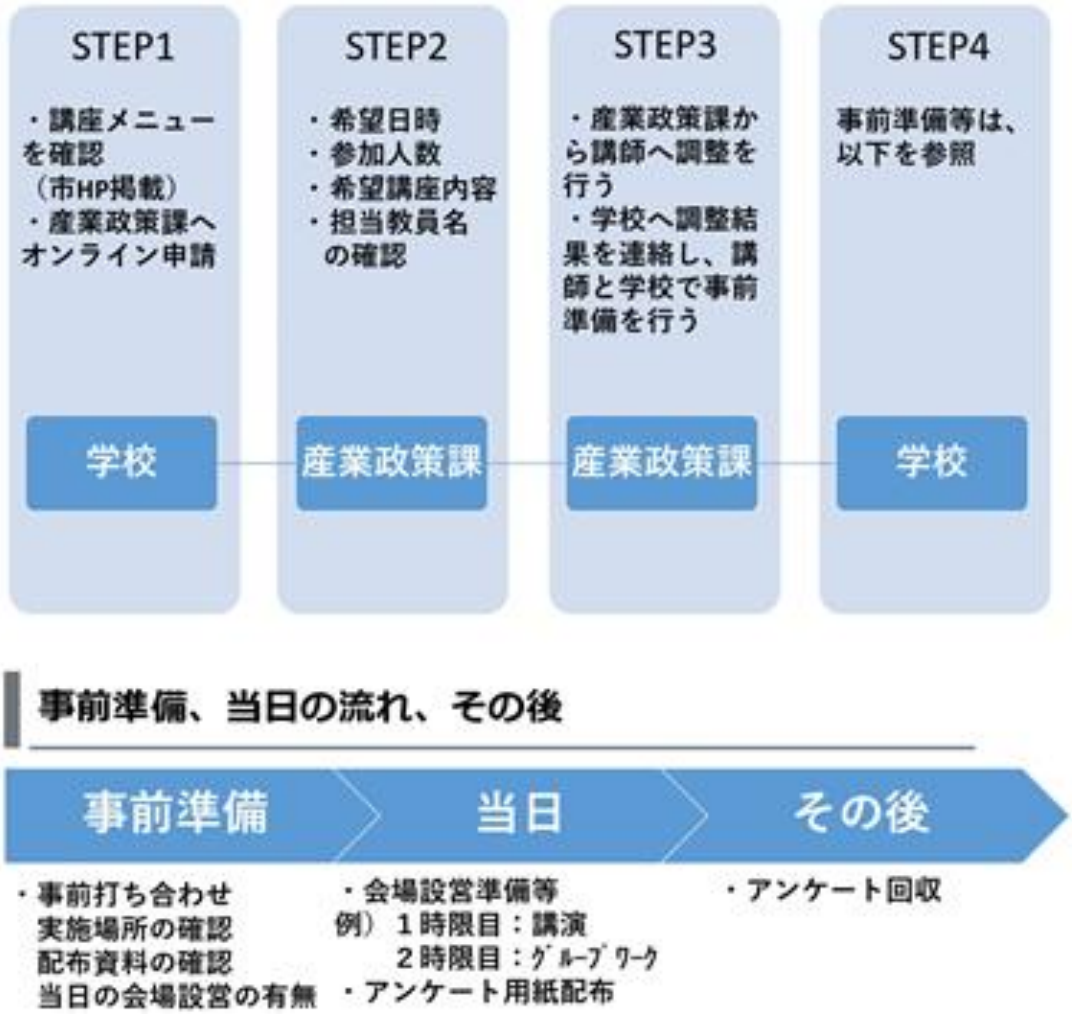
なお、「出張講座」「現場見学（Open Site）」は、糠床モデルの実証実験の成果により、その効果を検証するものであり、新たな課題や問題が出れば、再び産業振興会議の糠床に投入して「解」を見出していくサイクルを行うこととなるため、継続的な実施、そして状況に応じた柔軟な変更が重要になってくる。

３-１　制度設計（出張講座と現場見学（Open site）の仕組み）

出張講座について、学校からの依頼で企業等が協力してこれまでも講座や講演が行われているが、学校現場に負担をかけることなく実施することを念頭に、依頼から実施までの仕組みを構築した。

なお、出張講座の仕組み構築、コンテンツ作成にあたっては、産業振興委員である校長先生、教育委員会、学校長会といった学校現場に関わる方々から意見をいただけたことで、実効性があるものとなった。

〔出張講座の仕組み〕



現場見学（Open site）は、これまでも学校からの依頼で、企業等が工場見学や店舗見学といった取り組みに協力して行われているが、学校からは「受け入れてもらえる企業を探すのに苦労する。」「どこに問い合わせすればよいか分からない。」といった声がある。

現場見学（Open site）の仕組みとして、産業政策課を窓口として市内学校から一括して問い合わせを受け、学校からの工場見学実績がある「みせるばやお」と連携し、学校からの要望にマッチした企業等との調整や参加児童数等に応じた行程の作成などを行うこととした。具体的な仕組みの構築については、今後、出張講座の仕組みに合わせてオンライン申請を活用するなどし、構築していくこととする。

3-2　コンテンツ（出張講座と現場見学（Open site）の内容）

A　出張講座

出張講座のメニューづくりについては、次に説明する二つの視点に基づき、当該審議会で議論を重

ね作成したものである。まず一つ目は、将来への明確なビジョンを持たずに不安を抱える子どもたちに対して、挑戦の価値と楽しさを伝え、自己実現に向けた積極的な姿勢を育むといった視点である。次に、二つ目は、経営者と子どもたちのつながりは、地域社会全体におけるイノベーションエコシステムの構築に寄与し、八尾市における「挑戦することがかっこいい。」という風土の醸成をめざす、といった視点である。

講師については、産業振興会議の委員を中心とした経営者の積極的な参画により、実践的な講座メニューがうまれた。各講師は、これまでも学校などで講演や講座を実施した実績があり、地域全体で価値創造をめざす「やお糠床モデル」を体現できるメンバーとなった。

最後に、講座メニュー・講座プロフィールを提言書の「学校向け別冊」として取りまとめ、八尾市の学校長会で案内するとともに、市ホームページに掲載し随時更新するかたちをとった。今後持続的な取り組みにしていくためには、講師陣の拡充と資質向上を目的に、講師育成プログラムを展開し、「みせるばやお」を活用したセミナーを通じて、教育の質の向上と多様性の確保を図ることが重要となってくる。

B　現場見学（Open site）

産業振興会議において、委員の中には、「小学校のときに見た工場見学の体験が今も記憶に残っている。」といった意見もあり、子どもたちにとって現場を体感することができる機会は、貴重な機会になると考える。ものづくり工場から商業施設、個人経営の店舗まで、学校だけではない地域全体を子どもたちの学びの場と捉え、多くの子どもたちに学んでもらうためのコンテンツを作成することが必要である。今期の産業振興会議では時間的な制約のためコンテンツ作成まで至らなかったが、今後、コンテンツ作成のためには、受け入れ実績のある「みせるばやお」の取り組み事例を参考にするなど学校と受け入れ企業等が積極的に取り組めるものとすることが重要である。

第４章　考察

以上、ここまで令和 4 年－令和 5 年度の産業振興会議において展開してきた議論ならびに実験的実践について述べてきた。これらの試みは、すでに八尾市の諸団体や市民、企業によってすでに展開されてきたもの、さらに新たに企画されたものなど、多岐にわたっている。この自律的かつ多様な試みが企てられ、実践されているところこそ、八尾市の強みの一つである。

4-1　地域エコシステムにおけるアクターとしての行政の役割

かつての多くの行政的施策においては、目的や目標の明確化と計画の策定、それにもとづいた実施というコーゼーション的なプロセスにもとづくものが多かった。このやり方が間違っているのではない。ただ、八尾市の地域文化的な魅力の一つである現場主義・現地主義的な姿勢を活かすには、第 1 章でも言及したエフェクチュエーション的なやり方が適合する場合も少なくない。近年、八尾市の企業や、地域エコシステムとしての八尾に注目が集まっているのも、この二つの考え方を八尾市がうまく混ぜ合わせてきたからである。その意味において、近年の八尾市の活性化において、一つのアクターとしての行政が担っている役割はきわめて大きい。まさに「かき混ぜる」「かき混ざる」アクターとして、企業や諸団体、市民とともに糠床の醸成の一役を担っているわけである。こういった行政の参加的姿勢や、それにもとづく諸施策は、今後も継続して進めていくことがきわめて重要である。

4-2　ケアと協働に支えられる価値創造の促進：多様なアクターどうしの関係性の“発酵”

同時に、これは行政だけで担えるものではないことも、今回の実証実験からははっきりと窺い知ることができる。すでに述べたように、八尾市における市民や企業、諸団体の自律的でアクティブな、さらに言えば一人ひとりの個性や違いを認めたうえで、「支え合う＝ケアしあう」「一緒にやってみる＝協働する」という風土は、産業振興を通じた市民生活の実り豊かさを基盤から支えている。

今期の産業振興会議における実証実験の大きな一つである「子どもの創造性の育成」は、地域の企業や経営者といった産業関係のアクターの支援協力がきわめて重要であることはもちろんだが、学校という教育機関の支援協力もまた同様に重要である。この実証実験の企画立案にあたっては、八尾市の教育委員会や小中学校の校長先生方、さらに現場での先生方のご理解とお力添えを得ることができている。ここには、「われわれであれば、こういったかたちでお手伝いできる」という、それぞれのアクターがなしうる貢献を持ち寄り、それをうまく結びつけて、良質な化学反応としての“発酵”を促していくという基本姿勢がある。

この点を促していく役割にこそ、4-1 で言及した行政の新たな役割や意義がある。

4-3　これからの八尾市の産業政策の新たな姿に向けて：「やお糠床モデル」のさらなる発展

幸いなことに、八尾市の産業商工関連イベントは、実に多くの注目を集めるようになりつつある。令和 5 年 10 月末に開催された YAO FESTA や FactorISM, こうば de マルシェなどが一体となって開催されたイベントは、きわめて多くの市民のみならず、市外からの参加者も得ていた。こういった八尾市内部と八尾市外部をつなぐ試みは、今後も重要な意義をもってくると考えられる。

というのも、例えば School FactorISM や近畿大学×FactorISM, 起業支援といった試みは、八尾市外からの八尾への就職や移住などを促す可能性がある。それによって、八尾市に新たなメンバーが

加わることになり、知的資産や活動などの増加によって地域の社会経済が活性化し、ひいては八尾市全体の実り豊かさにもつながっていく。そのためにも、今期の産業振興会議において展開された試行的実験的な姿勢は、今後もさらに発展していくことが望ましい。

この点をどのように具体化していくのかについては、第 5 章の提言において述べることにしたい。

第５章　提言

本章では、今期の産業振興会議での議論ならびに実験などの成果をうけて、以下の 3 点について提言したい。

5-1 様々な課題のくみ上げ

今期の産業振興会議においても、委員をはじめとして、「こういったことに取り組んでいるが、新しい展開は可能だろうか。」「こういった点に取り組んでみたい。」といった提案や、解決すべき課題として認識されている事象の提示などがあった。こういった提案や課題は「やお糠床モデル」にとって、新たな価値創造のための“種”となりうる。

その点で、こういった提案や課題を広く汲み上げるしくみが必要となる。現在の産業振興会議は、この役割の一端を担っている。しかし、産業振興会議の委員は人数的にも限られており、また提案や課題を汲み上げる仕組みを持っているわけではない。その点で、八尾市に存在する多種多様な提案や課題を汲み上げるための仕組みや方法を整備することが必要である。これによって、「やお糠床モデル」を継続的に展開（醸成）し、価値創造のための“糠床”たらしめることが可能となる。

5-2 従業員同士の交流

八尾市においては、中小企業が多く存在する。中小企業における人材不足は深刻なものがあるが、八尾市内の中小企業においては、毎年でなかったとしても定期的に新規雇用をおこなっている企業が増えてきている。また、八尾市の企業の魅力を知って、転職などのかたちで雇用されるケースもある。ただ、こういった雇用ないし採用の場合、同期や同世代の従業員が同じ企業内にいないことも珍しくない。世代を超えたつながりが重要であることは言うまでもないが、近しい感覚を持ち合わせた同世代との交流が少ないことは、離職率を高める原因ともなりうる。離職率の上昇は、八尾市の価値創造能力を減退させる危険性を含んでいる。

この点を解消するための方策は複数考えられる。一般的には、給与ないし可処分所得の増加、職務内容の魅力向上、福利厚生の充実などが挙げられるが、それらと並んで社会的交流の充実も挙げることができる。社会的交流とは、直接的な仕事での関係性ではなく、友人ないし隣人的な関係性の構築のことをさす。これは、外部から強制されて構築されるものではない。しかし、その土壌を整備することは、八尾市における産業振興の基盤としてきわめて重要な意義を持つ。

実際、今期の産業振興会議のなかで提唱され、実験として展開されている 2-5 の新社会人の交流促進の取り組みは、すでに成果が現れはじめている。こういった交流の存在は、八尾市の中小企業に就職しようとする学生にとっても、安心感を提供しうるものと考えられる。

これらの試みは、民間ベースで実施されることが好ましいが、地域エコシステムの充実という点からも行政からの支援がなされることが望ましい。

5-3 学校との連携

第４章でも言及したが、Be Makers!を実現していくためには、子どもの頃からさまざまな魅力（や、課題）に触れ、それに対して自由に想像力をめぐらせ、多様な可能性を創造することの楽しさを実感してもらえる機会を用意することが肝要である。これまでも小学校や中学校において、こういった点

の重要性はすでに認識され、またさまざまな取り組みがなされてきた。ただ、同時に小学校や中学校に求められることも多岐にわたるため、教職員の負担が過重になってきていることも事実である。

そこで、産業界から「社会で活動することのおもしろさ」や「自由に想像/創造できる楽しさ」を児童・生徒・学生に、体感して、実験的に実践してもらえる機会やプログラムを提供することを提言したい。これは、経済産業省が平成 27 年 3 月に公表した『「生きる力」を育む起業家教育のススメ：小学校・中学校・高等学校における実践的な教育の導入例』において紹介されたものとも軌を一にする。ここでは、これまでの教科学習との連携性も念頭に、創造性を発揮できるような学習機会を提供することがめざされている。

これらの取り組みを具体化していく際には、やはり企業家や経営者、さらには従業員、また地域社会や市民の協力が必要になる。その際には、貢献に対する報酬謝礼やプログラム構築にかかる諸実費を賄う必要がある。こういった点に関しては、行政からの支援が重要となろう。

また、産業振興政策と教育政策は、それぞれ別個のものとして動いているのも事実である。その点で、横連携を定期的に実施していくことも必要である。幸い、すでに令和 5 年にこの横連携は行われはじめている。これらを定期的におこなえるような制度設計や八尾市総合教育会議での提案も具体的に検討していくことを提言したい。

～各委員からのメッセージ～

【高校生・大学生・新卒者＝八尾に関心を持ってくださっている若いみなさんへのメッセージ】
―――座長　山縣　正幸

八尾に関心を持ってくださっている、あるいはすでにかかわっておられる若いみなさんへ
八尾というまちは、つねに何か新しいこと、楽しいことがどこかで湧き出しています。そして、一人ひとりのなかにある“泉”を大事にしてくれるまちでもあります。ユニークで魅力的な企業、八尾というまちで新しいことをやってみようとする人々、そして明るく楽しいまちをつくろうとしておられるみなさん、いろんな方が支え合いつつ、それぞれが実現したい状態へと向かって動いていくことで、一人ひとりにとってよりよい人生が送れる「八尾」という場が生み出され続けているのです。
八尾に関心を持ってくださっている、あるいはすでにかかわっておられるみなさんもまた、そのメンバーです。一緒に、この八尾というまちを魅力的な場にしていきましょう！

【小学生、中学生、高校生へのメッセージ】―――副座長　滝本優枝

日本経済の先行きが不透明なことから、漠然とした不安を抱えている生徒さんがいらっしゃると予想しています。

不安を一気に吹き飛ばすのは難しいかもしれませんが、「未来が定まっていない」ということは「どんな風にでも変わることができる」という希望そのものなのです。

八尾市にはあなたの一歩を手助けしてくれるいろんな種類の仕事をしている先輩方がいます。まずはそんな人たちに混ざることから始めてみよう。話を聞いたり、見学させてもらったり、お手伝いしてみたり。小さな一歩を、「混ざってみる」ことからはじめてみませんか？

【小学生、中学生へのメッセージ】――― 委員 西川知江

「八尾の子どもたちは幸せだなあ」と、強く感じました！

チャレンジすることを、心から応援してくれる大人がたくさんいます。子どもを八尾の街を元気にするために、子どもたちにできることはないかと一生懸命考えてくださっています。

子どもたちが知らない社会や大人の世界、不安だったり、まだ興味もないかもしれない、でも、大人の世界は「楽しいよ、何でもできるよ、チャレンジはかっこいいよ」と、教えてくれる方々です。この方々の力をお借りして、ちょっと先の未来に興味を持ち、夢を広げてみてください。いろんな経験をして、しんどいことを楽しめる大人になってほしいです。

【中学生、高校生、大学生、新卒へのメッセージ】――― 委員 美馬功之介

八尾という街は大人もこどもも「チャレンジしやすい街」そして「チャレンジした人を応援する人であふれた街」していきたいと思っています。おせっかいでパワーあふれる人の多い八尾なら必ず出来ると信じています。こどものころから街ぐるみで個性を伸ばし、企業家精神を教え、「学校と地域の大人の交流」、「企業同士の交流」、「企業と市民の交流」などが進めば、ますますこの八尾の街に活力が増すはずです。まずは大人が人生を楽しみながらチャレンジしていく姿を見せていきましょう！こどもも未来も輝かせる為に！

【大学生、新卒生、創業される方へのメッセージ】――― 委員 黒木啓良

次の時代を創るのは、スタートアップを担う「若者起業家」や、企業・組織の中で「新たなチャレンジをする方」です。

起業やチャレンジには様々なハードルやリスクを伴いますが、八尾にはこれらを支援する仕組みやメンター・サポーターがたくさんいらっしゃいます。

八尾から大阪・関西・日本を元気にしていきましょう！

【大学生、新卒生、創業される方へのメッセージ】――― 委員 今岡和雄

多くの人が、自分の未来にどんな未来が待っているのか？ それを考えることはあまり無いのではと思います。どうすればハッピーになれるのか？ 自分自身の理想の姿ってなんだろう？と、一度考えてみてほしいと思います。もしも理想や希望、または夢を妄想することができれば、それは夢の扉に手を掛ける始まりになるはずです。そしてぜひ、その実現のための小さな第一歩を踏み出してほしい。そんな人を支える場所や応援してくれる人、ヒントやチャンスを与えてくれる人がこの八尾市にはたくさんいます。そんな「糠床」を、八尾の皆さんとどんどん作っていきたいと思っています。共に手を取りあって進んでいける、そんな未来を皆で築いていきましょう！

【新卒、創業支援、地域の方へのメッセージ】――― 委員 山田裕也

提言書にあるコンテンツは子どもから、学生、そして大人にまで幅広く網羅しています。八尾市の関係人口の子どもから大人までを巻き込んだ今後の産業振興計画を実現するための大事な基礎の部分を創っている。そんな気がしています。「ぬか床モデル」を根底に、アイデア、人、困りごとなど浸

かっているものを産業振興会議でかき混ぜて、あるいはかき混ざってできたものです。このコンテンツを享受する方々が、将来、この八尾の地で就職したり、創業したり、地域に根付いた活動を一緒にしていくことが楽しみであり、関わらせていただけることに感謝しています。

【創業される方へのメッセージ】――― 委員　梶本比沙

“自分は何者で、この世の中にどんな価値を提供できるのか”

起業する際には明確に整理しておかなければならないことと考えられていますし、確かにその通りであると思います。

ですが、「その答えが明確にならないまま走り出したって、それはそれで良い！」とも思うのは、創業支援を事業としている立場の人間としては正しくないかもしれません。でも、私の起業の始まりはそうだったのです。

正しいことはもちろん大切ですが、それに囚われ過ぎると最初の一歩がなかなか踏み出せなくなることもあります。

肩の力を抜いて、ワクワクして今すぐ走り出したくなるようなことが見つけられたら迷わずＧＯ！です。でもワクワクはその辺には落ちていないし、勝手に舞い込んでくることも少ないでしょう。自ら動いた人だけが手にするものなのです。

八尾の街が、ワクワクした人で溢れることを期待しています！

2022-2023 年度産業振興会議提言書

発行　令和 6 年 2 月（刊行物番号 R5 154）